

北欧諸国における持続可能な発展戦略

阿 部 望

1990年代以降、世界中で、とりわけ欧州連合（EU）において、持続可能な発展（SD - Sustainable Development）に対する関心が高まってきている。中でも北欧諸国においてSDに対する関心が特に高いように思われる。実際、北欧諸国は伝統的に高度福祉社会として知られているし、また環境問題に強い関心を持ち、環境の改善に熱心に取り組んでいる。さらに北欧諸国の国際競争力は最近の調査では常にトップグループにランクされている。持続可能な発展が、環境、社会、経済の3つの次元から構成されていることを考慮すれば、上記の事実は、北欧諸国が持続可能な発展の経路を力強く歩んでいることを示しているといえよう。このことが持続可能な発展に関する研究において、北欧諸国が魅力的な研究対象となることの理由である。

このことを最新のデータで確認しておこう。以下の表を参照されたい。この表はロンドンに本拠を置く有力な民間のシンクタンクである Centre for Economic Reform が毎年公表している「リスボン・スコアボード」第5号の結果を要約したものである。それはEUの「リスボン戦略」に基づいた「構造指標」を用いて、各国のパフォーマンスを評価したものである。「構造指標」は、①全般的経済指標、②雇用、③技術革新と研究、④経済改革、⑤社会的格差是正、⑥環境、の6つの指標群から構成されており、いわばEUのSDを評価する一つの有力な指標とみなされているものである。

(表) EU 構造指標で見る北欧諸国のパフォーマンス (2005年)

総合的パフォーマンス (27か国中の順位)	国名	1999年以降の改善度 (27か国中の順位)	リスボン目標達成数 (39指標中)
1	スウェーデン	5	12
2	デンマーク	6	9
3	イギリス	2	7
4	オランダ	12	6
5	フィンランド	11	7

(出所) Centre for Economic Reform, The Lisbon Scoreboard V, 17 March 2005 から作成。

(注) 調査対象国が27カ国であるのは、EU加盟国の他にルーマニアとブルガリアを含んでいるからである。

この評価からわかるように、北欧諸国はSD水準の総合的パフォーマンスで群を抜いていることがわかる。スウェーデンが第1位、デンマークが第2位、そしてフィンランドが第5位である。この表はまたSD改善度をも示しているが、その順位は、水準の順位ほどは高くはなっていない。その理由は、すでに高水準に達している場合、その水準を向上させることは相対的により困難となる点に求められるであろう。

さて冒頭で言及した点に関して興味深い研究課題が2つ生じることになる。一つは、北欧諸国に共通の持続可能な発展戦略（SDS – Sustainable Development Strategy）というべきものが存在するか否か、そしてもし存在するとすれば、それは他の EU 諸国のそれとどこが異なっているのかを調べることである。もうひとつは、北欧諸国の近年の持続可能な発展の実績を調べることである。

北欧諸国の SDS を調べる場合、4つの空間を区別することができる。第一は北欧諸国の加盟しているグローバルな機関である国際連合（UN）と OECD である。第二は北欧の3カ国が加盟している EU である。第三はすべての北欧諸国が加盟する地域共同体である北欧地域（これは北欧理事会（The Nordic Council）と対応する）およびバルト海地域（これはバルト海諸国理事会（The Council of the Baltic Sea States）と対応する）である。そして第四は個別の北欧諸国である。

このような問題を研究するに際しては、SD 指標が極めて重要となる。というのは私は SD の政策の立案と実施に対して重大な関心を寄せており、よく定義された適切な指標がなければ、政策の効果の評価を行うことは著しく困難となるからである。とはいうものの、この指標問題は、実に多くの未解決の問題をはらんでいるのも事実である。

以上の枠組みを前提とすると、その研究内容は以下のような構成となるであろう。第1節では若干の歴史的展開をふまえた後で、主として北欧の3つの地域共同体（EU、北欧地域、バルト海地域）の持続可能な発展戦略（SDS）の構造と内容が検討される。第2節では北欧諸国の4カ国を対象としてその各国家の SDS を解析し、それを通して SDS の北欧モデルが構築される。最後に第3節において、EU の構造指標および「環境的持続可能性指標」を活用することにより、北欧諸国の SD の実績が考察される。

ここでとりあげた2つの研究課題に対して、概略以下のような結論が導かれる。

第一の問題（北欧諸国に共通の SDS というべきものが存在するか否か、そしてもし存在するとすれば、それは他の EU 諸国のそれとどこが異なっているのかという問題）については、北欧諸国は、北欧理事会の枠組みの中で、北欧地域の SDS を採択したという意味では、共通の SDS を有している。しかしながら、この地域には複数の地域共同体とそれぞれに対応する SDS が存在し、かつそれらが必ずしも同一の内容と構造を有しているわけではないことから、すべての人々に明確な形で北欧地域の SDS が存在していると主張することは無謀かもしれない。換言すれば、北欧における SDS は実に多様かつ多層な性格を有することが判明する。

第二の問題（北欧諸国の近年の持続可能な発展の実績）については、北欧諸国は SD の水準に関しては EU 内部でもかなり良好な実績を上げているが、他方では、それゆえに、SD の改善度の面では顕著な実績をあげているとはいえない。

この研究テーマに関しては、以上のような結論が得られたのであるが、ここでは残念ながら一つの重要な課題について検討することができなかった。それは、北欧諸国の SDS およびそこから派生する政策の実施の結果、北欧諸国の SD 実績がどの程度向上したのかの検証である。明らかにこの地域で SDS に重大な関心とエネルギーが傾注されてきたのは、この地域の人々が SD 水準の向上を希求しているからである。その意味で上述の課題は非常に重大な意義を持つのであるが、ここでは触れることができなかった。後日の課題としておきたい。